

第4章 関連文化財群とテーマ

1 関連文化財群を設定するにあたっての考え方

関連文化財群は、指定の有無に関わらないすべての文化財について、歴史的・地理的関連性に基づき一定のまとまりとしてとらえたものであり、文化財を活用する拠点となる博物館や資料館、およびまちづくりセンターなどの施設も関連文化財群を構成する要素とする。

なお、関連文化財群の設定にあたって、以下の点に留意する。

- (1) 構成する文化財間に歴史的・地理的関連性が存在すること。
- (2) 一連のテーマの中で保存・活用に結び付けられること。
- (3) 核となる文化財はこれまで十分な調査・研究がなされ、歴史性や価値が評価されていること。

2 関連文化財群の概要と設定

本市は、地形的には南東の丘陵部と中央から北部の平野部、そして湖岸部に分けることができ、それぞれの地域に伝わる歴史文化も多岐にわたる。本市の歴史的特性を余すところなく網羅し、その魅力や価値をわかりやすく伝えるには、地域や時代、内容により分類したテーマを設定する必要がある。そこで、次のとおり3つのテーマならびにテーマに沿った文化財が所在する地区をゾーンとして設定し、本市の歴史文化をとらえることとする。

メインテーマ(ゾーン)とサブテーマ(案)	歴史文化財群の内容
(1) 生産ゾーン ・ものづくり文化の源流 ・古代国家を支えた生産遺跡群 ・くらしと生業	野路小野山製鉄遺跡を中心とした 古代の生産の関連文化財群
(2) 信仰ゾーン ・信仰のかたち ・船奉行芦浦観音寺 ・信仰とくらし	国史跡芦浦観音寺跡を中心とした 信仰の関連文化財群
(3) 街道ゾーン ・宿場と草津宿本陣 ・草津を形づくる街道と津 ・宿場を取り巻く多様な文化 ・街道を彩る名物・人物 ・近代以降の交通路	国史跡草津宿本陣を中心とした 街道の関連文化財群

(1)「生産ゾーン」

① ものづくり文化の源流

本市の南西部(南笠、野路)から大津市東部にかけて広がる、瀬田丘陵上の生産遺跡群の持ついわばものづくり文化は、この地に突然現れたものではない。その源流として、弥生時代の中頃には鳥丸崎遺跡や宮前遺跡などで、玉作りが行われる。ゴホウラ貝の腕輪を模した鍬形石や、勾玉、管玉などを作る玉作りは、県下では草津市をはじめとした湖南地域に集中して認められ、互いに関連性を持つ集落と考えられる。

さらに玉作り以外に、草津市域の遺跡では木製品の加工も盛んに行われてきた。鳥丸崎遺跡からは、多数の木製品とともに、木偶が出土した。また、中沢遺跡から出土した弥生時代後期の和琴や舟形木製品からも、当時の加工技術がうかがい知れる。



図 4-1 中沢遺跡出土鍬形石



図 4-2 中沢遺跡出土和琴

市内を見渡した時、ものづくり文化の担い手は、その後も様々な形でその足跡を残している。古墳時代の早い段階から、北谷古墳群をはじめとした多くの古墳が草津市内に築かれることもその1つである。前期古墳として知られる北谷 11 号墳から出土した鉄製品や木製品の鍬形石は、当古墳に生産にかかわった人物が埋葬された可能性を示すものである。加えて、中畑遺跡や谷遺跡では滑石原石が出土し、工房とみられる住居跡も検出されており、特に中沢遺跡でみつかった鍬形石は国内 2 例目の集落跡からの出土である。

古墳時代の中頃には、狭間遺跡で古墳の周濠から、鳥形木製品や刀形木製品などの遺物が確認され、これらは当時の人々の宗教観の一端を示す貴重な遺物といえる。続く奈良時代から平安時代にかけて、大將軍遺跡では絵馬や齋串が見つかっており、多彩な木製品が、時代を通して市域の遺跡から出土している。

さらに、ものづくり文化の担い手の実像を考える時、「日本書紀」に興味深い記述がある。それは、垂仁天皇 3 年(634 年)に、新羅より渡来したとされるアメノヒボコが、近江国「吾名邑」に住んだという記録である。本市穴村町も近江国「吾名邑」の候補とされることや、アメノヒボコは竜王町から野洲市に展開する鏡山古窯址群に生産技術を伝えたとされることなどから考えると、渡来人がもたらした高い技術力によって、当時のものづくり文化が支えられていた可能性がある。



図 4-3 大將軍遺跡出土絵馬

また、本市穴村町には渡来人とされるアメノヒボコを祭る安羅神社が所在し、野村町にも同名の神社があるほか、栗東市十里には小安羅神社が存在することから、当地域と渡来系氏族との関連が注目される。

加えて、オチワケノミコトを祭神とする小槻神社ならびに栗東市の小槻大社は、その名のおおりに古代の豪族小槻氏とかかわりを持つとされる神社であり、神社周辺地が彼らの拠点であったと推定される。小槻氏は小槻山君とも称され、山君の名から、瀬田丘陵の生産遺跡に不可欠な金勝山地および派生する瀬田丘陵部の森林・鉱物資源と何らかのかかわりのある有力者とみられる。

このように、弥生時代から脈々と続く玉作りおよび木製品加工技術など、ものづくりの文化が本市には古くから根付いていた。



図 4-4 安羅神社



図 4-5 小槻神社

② 古代国家を支えた生産遺跡群

古代の瀬田丘陵上には、製鉄・製炭・製陶といった山林資源を多く必要とする生産遺跡が展開する。特に野路小野山製鉄遺跡では、整然と配置された 20 基以上の製鉄炉、製鉄に使用したとみられる炭窯、原材料となった鉄鉱石、生産活動を管理するための管理棟などの存在が発掘調査によって明らかとなった。遺跡規模とともに、製鉄原料にこの地では産出しない高純度の鉄鉱石を使用している点から、大津市の史跡近江国庁跡など、国の重要拠点と深く関連する、古代律令国家を支える官営工房的性格が強い製鉄遺跡である。

市内では、野路小野山製鉄遺跡の東側位置する木瓜原遺跡で、製鉄・須恵器生産ならびに梵鐘鑄造がなされたことがわかっており、観音堂遺跡では製鉄炉などの燃料としたと考えられる木炭生産や須恵器生産が、笠山遺跡では須恵器生産が行われ、この地は古代国家を支える巨大な生産遺跡群を形成していた。

さらに、丘陵部の先端に位置する矢倉口遺跡や岡田追分遺跡で鑄造が行われていたことが、鑄型や金鉗の出土などから判明しており、生産機能を有した集落が広く展開していた。

また、野路小野山製鉄遺跡周辺を見ると、生産遺跡は草津市域にとどまらず、大津市域にも展開しており、山ノ神遺跡では製陶に用いられた窯を転用して島尾が焼かれ、また源内峠遺跡では、多量の鉄鉱石や鉄滓とともに製鉄炉が確認されている。さらに、月輪南流遺跡では製鉄炉こそ発見されなかったものの、多量の鉄滓と須恵器の窯跡が見つまっている。

さらに、丘陵部の先端に位置する矢倉口遺跡や岡田追分遺跡で鑄造が行われていたことが、鑄型や金鉗の出土などから判明しており、生産機能を有した集落が広く展開していた。

このように、本市は南東部の丘陵地帯を中心に古代国家を支える一大生産拠点であり、丘陵地帯に展開する生産遺跡群を含め、製鉄・製陶などの生産活動に由来する歴史文化を形成していた。

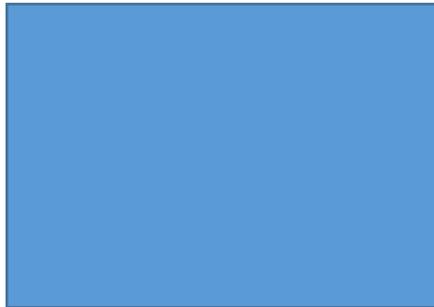


図 4-6 野路小野山製鉄遺跡復元模型

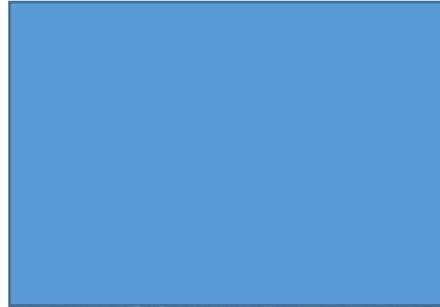


図 4-7 木瓜原遺跡梵鐘鑄造遺構

表 4-1 主な文化財等とテーマとの関連性

番号	名称	テーマとの関連性	サブテーマ
1	野路小野山製鉄遺跡	製鉄遺跡 テーマの核となる文化財	古代国家を支えた生産遺跡群
2	木瓜原遺跡	製鉄・製陶遺跡、梵鐘鑄造。立命館大学の地下に一部保存	
3	観音堂遺跡	製鉄・製陶遺跡	
4	笠山遺跡	製陶遺跡、鉄滓の出土から製鉄も行っていた可能性有	
5	西海道遺跡	製陶遺跡、笠寺廃寺に伴うとみられる生産遺構	
6	岡田追分遺跡	鑄造	
7	矢倉口遺跡	鑄造	
8	山ノ神遺跡	製陶遺跡(大津市)	
9	源内峠遺跡	製鉄遺跡(大津市)	
10	月輪南流遺跡	製陶遺跡、製鉄の痕跡(大津市)	
11	大將軍遺跡	官衙関連遺跡	ものづくり文化の源流
12	烏丸崎遺跡	玉作り、木製品加工	
13	宮前遺跡	玉作り	
14	谷遺跡	玉作り	
15	中畑遺跡	玉作り	
16	中沢遺跡	玉作り、木製品加工(鍬形石、和琴など)	
17	中沢遺跡出土祭祀関連遺物一括	鍬形石、子持勾玉、管玉ほか玉製品 腰掛、高杯、和琴ほか木製品	
18	北谷 11 号墳および北谷古墳群	鉄製工具、鍬形石(未製品含む)副葬	
19	追分古墳	市域南部の古墳	
20	南笠古墳群	追分古墳・北谷古墳群に続く時期の古墳群	
21	小槻神社	小槻山君	
22	小槻大社(栗東市)	小槻山君	
23	矢倉口遺跡	集落跡、鑄造遺跡	

24	岡田追分遺跡	集落跡、鑄造遺跡		
25	安羅神社(穴村町)	アメノヒボコ伝承		
26	安羅神社(野村)	アメノヒボコ伝承		
27	小安羅神社(栗東市)	アメノヒボコ伝承		
28	志那神社			
29	惣社神社			
30	三大神社			
31	平湖	淡水真珠づくり		
32	吉田家住宅主屋	淡水真珠づくり		
33	門ヶ町遺跡	玉作り		
34	柳遺跡	玉作り		
35	御倉遺跡	玉作り		
36	中兵庫遺跡	玉作り		
37	志津まちづくりセンター	文化財活用拠点		—
38	志津南まちづくりセンター			
39	老上まちづくりセンター			
40	老上西まちづくりセンター			
41	玉川まちづくりセンター			
42	南笠東まちづくりセンター			
43	山田まちづくりセンター			

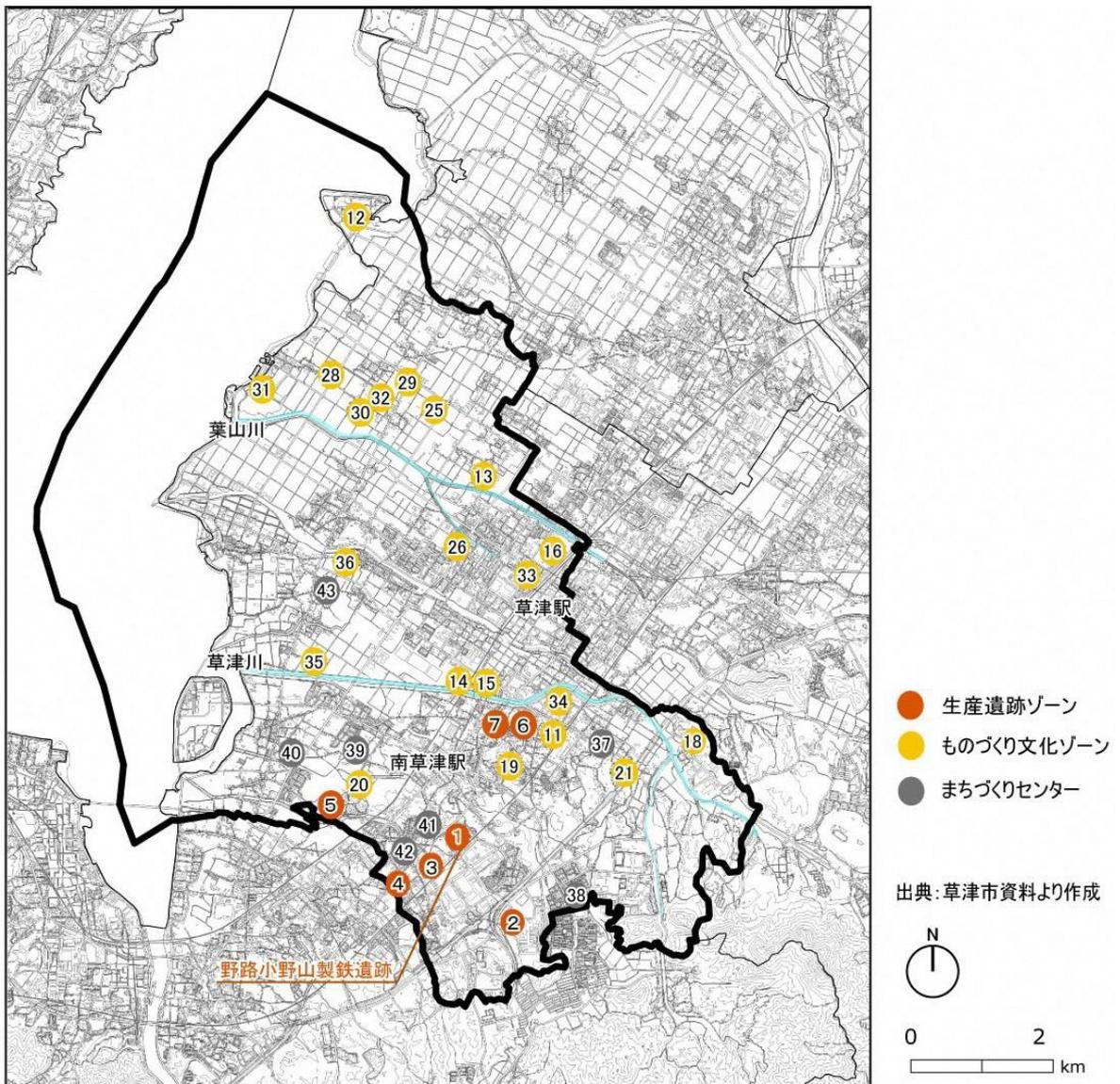


図 4-8 テーマ1 「生産ゾーン」に関する文化財の分布

(2)「信仰ゾーン」

① 信仰のかたち

大津の地に天智天皇によって近江大津宮が遷都された時と前後して、古代寺院跡とされる遺跡が、草津市域をはじめとした湖南地域に数多く営まれることが知られている。

宝光寺には、平安時代中期に作られた国指定重要文化財の木造薬師如来像が所在するが、埋蔵文化財宝光寺跡は古代寺院跡としても知られ、発掘調査により、大量の瓦や土器とともに講堂跡とみられる瓦積基壇が確認された。

^{おろしも}下物天満宮境内に寺域が推定されている市指定史跡花摘寺跡は、多くの石造物で知られ、礎石や石造り露盤、手水鉢に転用された塔心礎など、寺院の石材が境内に集積され、また、発掘調査でも多くの古代瓦が出土している。観音堂廃寺は天神社・観音堂・常教寺境内で古代瓦の散布が認められるほか、常教寺境内に円形の穴を持つ礎石が残る。

これらのほか、現存する芦浦観音寺の前身寺院と推定される観音寺廃寺は、寺伝によると、聖徳太子開祖、秦河勝創建とある。片岡廃寺は実態が不明な寺院跡であるが、古代瓦の散布で知られる。加えて、大般若寺という古代寺院が志那の地にあったという記述が「^{こうふくじかんむちようそ}興福寺官務牒疏」に認められる。

以上のように、市内北部には数多くの古代寺院の存在が推定されており、これらのうち宝光寺跡、花摘寺跡、観音堂廃寺については、発掘調査の進展によってその実態が徐々に明らかとなっている。



図 4-9 史跡花摘寺跡



図 4-10 笠寺廃寺跡で出土した古代瓦

さらに、現存する寺社に目を向けると、草津市内の国・県・市指定文化財として登録されている建造物群の多くは、寺社の本殿などとして、[→]歴史的な価値を持つだけでなく、地域の人々の信仰と郷土愛によって現在まで守り伝えられている。

貞享2年(1685)に移築された観音寺阿弥陀堂の建物は、室町時代に建てられたものであり、同時代の国指定有形文化財として、老杉神社本殿、伊砂砂神社本殿、新宮神社本殿などが知られる。しかし、例えば^{いぎしろう}印岐志呂神社の由来が^{びだつ}敏達天皇13年(584)年までさかのぼることから、寺社への信仰の由来が古代までさかのぼるとされる事例もある。

一方で、旧草津川以北を中心として、仏像が数多く所在し、現在草津市では平安時代から鎌倉時代の作とされる11軀の仏像が国指定文化財となっている。「近江名所風俗屏風」にも描かれ、蓮華の景勝地として著名な^{れんかいじ}蓮海寺の地蔵堂には国指定重要文化財木造地蔵菩薩立像が祀られ、水難除けの地蔵として広く信仰される。



図 4-11 老杉神社本殿



図 4-12 新宮神社本殿



図 4-13 蓮海寺地蔵堂の
木造地藏菩薩立像

また、各地に残る建造物のみならず、祭礼や年中行事などにも、中世からの信仰の姿を見出すことができる。いずれの行事も、地域住民や保存団体などによって、それぞれの地域の伝統として、今日まで守り伝えられてきた貴重な民俗文化財である。

民俗文化財において、その起源が中世までさかのぼるとされているものにサンヤレ踊りがある。サンヤレ踊りは、現在の矢倉・下笠町・志那町・志那町吉田・志那中町・片岡町・長束町の7地域で保存・継承され、風流踊りをその起源に持つとする民俗芸能である。風流踊りとは、華やかな衣装を身に付けた集団が歌い舞うもので、室町時代に近畿各地で流行した。草津のサンヤレ踊りは、近世初期の衣装が伝承されていることもあり、風流踊りの古い形を残しているとされ、国の選択無形民俗文化財に選ばれている。サンヤレ踊り以外にも、同じ風流踊りの系譜を持つものとして、伊砂砂神社で行われる渋川の花踊り、上笠天満宮講踊が挙げられる。風流踊りは、京都近郊を発祥とする説もあるが、古くは東山道、近世以降は東海道・中山道が通り、京都から多くの人や情報が行き交った草津であったからこそ、風流踊りの系譜を持つ芸能が多く残されているとも言える。

サンヤレ以外にも、古くからの信仰の姿を伝えるものとして、下笠町の老杉神社で行われる頭屋行事がある。この行事は、神社を中心に「村」と呼ばれる集団（宮座）が中心となって執り行うオコナイ（神事）である。宮座を構成する八ヶ村は、現在の行政区域とは全く異なるものであり、その起源は中世にまでさかのぼるといわれる。このうちの一ヶ村が毎年当番となって、神饌しんせんの準備から奉納、神事、直会の中心となる。一連の行事は、中世の宮座の姿を色濃く伝えるものとして、滋賀県選択無形民俗文化財に選ばれている。また、鮒ふなずし切り神事で知られる下寺町の天満宮でのオコナイも頭屋行事と同様に宮座を強く残す神事である。



図 4-14 草津のサンヤレ踊り



図 4-15 鮒ずし切り神事

② 船奉行芦浦観音寺

中世から近世にかけて、琵琶湖水運は政治的・軍事的に重要な役割を担っていた。湖上交通の基礎が作られた戦国時代から近世初期まで、琵琶湖の船舶およびその航行を統括していたのが、市北部に位置する芦浦観音寺である。

芦浦観音寺は、寺伝によると、聖徳太子の開基、秦河勝が創建したと伝える。水運に携わり始めた時期は不明だが、芦浦観音寺は少なくとも戦国時代にはすでに、湖南を治める佐々木氏（六角氏）に渡船の手配を命じられ、最寄りの港である志那と、対岸の坂本の間の航行を保障されている。のちに佐々木氏に代わってこの地を治めた織田信長も、同様に志那渡船の役割を任じ、芦浦観音寺の寺領と水運の権利を保障した。

豊臣政権下では、第9代住持（住職）の詮舜せんしゆんが近江国の蔵入地代官くらいりちと船奉行を兼任し、さらに大きな役割を果たす。船奉行は琵琶湖の水運を統括し、船の改めを行なって、極印（焼印）を押すものとされた。湖上を航行するすべての船が、芦浦観音寺の管轄下に置かれることになったのである。観音寺には近世においても同様の役割が与えられ、貞享2年（1685）に船奉行と湖南の代官職を解任されるまで、船の数や規模の点検、運上銀の徴収を行なった。この後、湖上の物資輸送は江戸時代中期に最も盛んになるが、芦浦観音寺のもとで整えられた体制がその礎になったと言える。

芦浦観音寺はまた、その来歴によって多くの文化財を伝える。阿弥陀堂は元亀2年（1571）年に本寺である普観寺の建物を、書院は貞享2年（1685）に野洲郡永原村の永原御殿を移築したものといわれ、ともに国指定重要文化財である。元亀2年（1571）の比叡山焼打ちの際には、延暦寺から仏像や仏画が戦火を避けて持ちこまれたともいう。絹本著色黄不動尊像・木造阿弥陀如来立像など、8件の重要文化財をはじめ、豊臣秀吉自筆北野湯茶道具目録、芦浦観音寺文書などの県指定文化財などのほか、中・近世の書跡・絵画・工芸品も多数所蔵している。



図 4-16 芦浦観音寺



図 4-17 観音寺阿弥陀堂

表 4-2 主な文化財等とテーマとの関連性

番号	名称	テーマとの関連性	サブテーマ
1	芦浦観音寺	船奉行、蔵入地代官を担う。テーマの核となる文化財	船奉行 芦浦観音寺
2	観音寺書院	芦浦観音寺境内に所在	
3	観音寺阿弥陀堂	芦浦観音寺境内に所在	
4	芦浦遺跡	境川に接する中世の水運拠点	
5	船印	芦浦観音寺所蔵、湖上交通関係資料	
6	芦浦観音寺文書	芦浦観音寺に保管される古文書	
7	豊臣秀吉自筆北野湯茶道 具目録ほか	芦浦観音寺所蔵国指定・県指定文化財	
8	宝光寺跡	古代寺院	信仰のかたち
9	史跡花摘寺跡	古代寺院	
10	観音堂廃寺	古代寺院	
11	大般若寺	古代寺院	
12	木造聖観音立像	下物町観音堂に所在	
13	木造阿弥陀如来立像	芦浦町観音寺に所在	
14	木造地藏菩薩立像	芦浦町観音寺に所在	
15	木造薬師如来立像	北大萱町宝光寺に所在	
16	木造地藏菩薩立像	志那町蓮海寺に所在	
17	木造普賢菩薩坐像	志那町志那神社に所在	
18	木造聖観音立像	芦浦町観音寺に所在	
19	木造三面六臂観音立像	志那町橘堂に所在	
20	安国寺遺跡京出土品	経筒およびその副葬品	
21	一夜伏塚遺跡	比叡山の僧宥覚の塚跡と伝えられる	
22	印岐志呂神社	志那町と守山市を結ぶ道中に立地。中世の軍事的要衝 片岡のサンヤレ踊り、長東のサンヤレ踊り	
23	立木神社	矢倉のサンヤレ踊り	
24	老杉神社	下笠のサンヤレ踊り、老杉神社の頭屋行事	
25	春日神社	長東のサンヤレ踊り	
26	志那神社	志那のサンヤレ踊り	
27	蓮海寺	志那のサンヤレ踊り、かつての蓮の景勝地	
28	三大神社	吉田のサンヤレ踊り	
29	惣社神社	志那中のサンヤレ踊り	
30	伊砂砂神社	渋川の花踊り	
31	上笠天満宮	上笠天満宮講踊	
32	鮒ずし切り神事	上笠町天満宮のオコナイ、中世の宮座制度を受け継ぐ	
33	琵琶湖博物館	文化財活用拠点	—
34	笠縫まちづくりセンター		
35	笠縫東まちづくりセンター		
36	常盤まちづくりセンター		

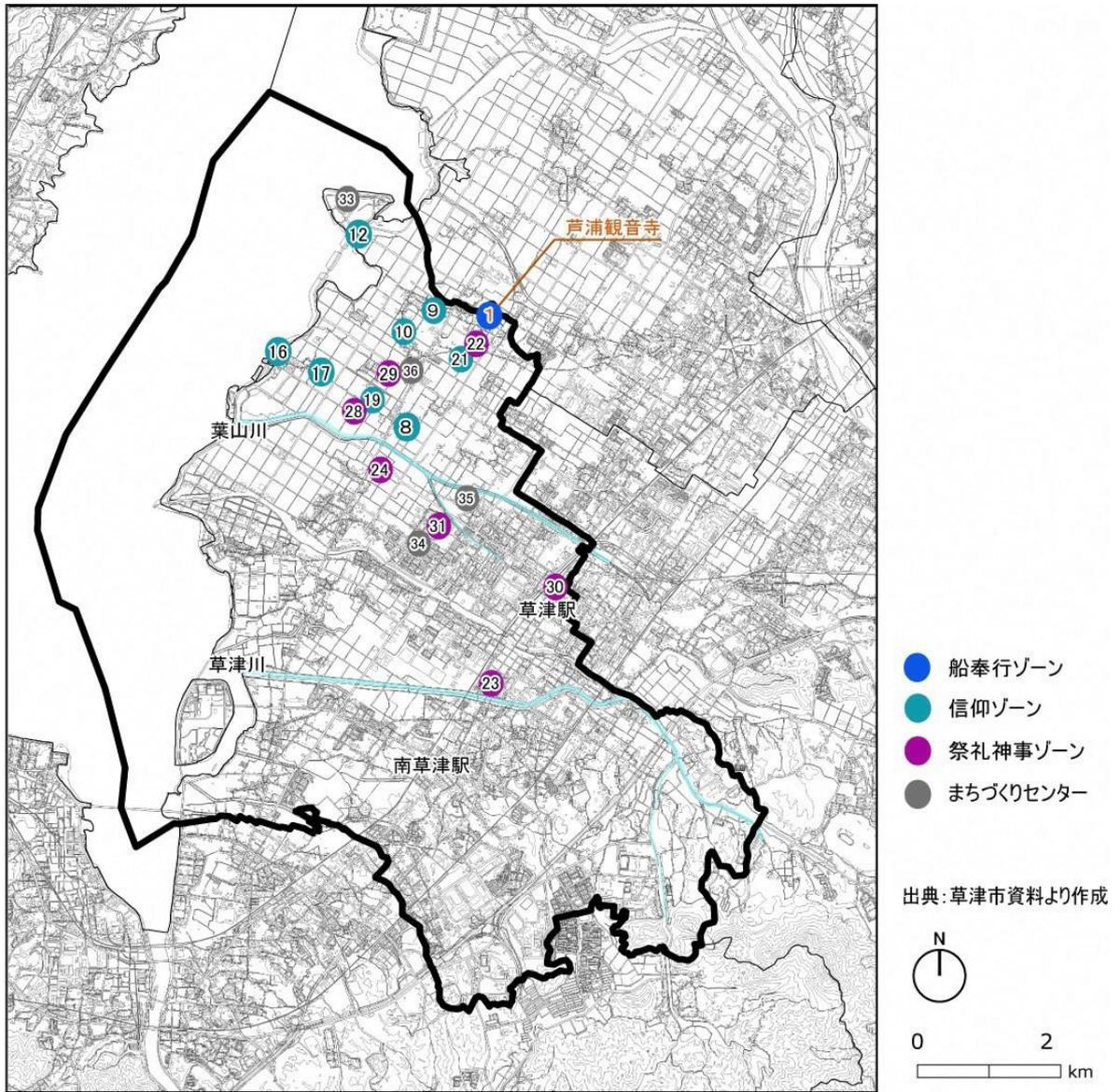


図 4-18 テーマ 2 「信仰ゾーン」に関する文化財の分布

(3) 「人と物の行き交う草津」

① 宿場と草津宿本陣

本市の特性を見る上で、江戸時代以降に特に顕著なのが、交通の要衝としての位置づけである。

古代には道路遺構が野路岡田遺跡および黒土遺跡で検出されており、東山道に關係する遺構とみられる。さらに中世に入ると、野路岡田遺跡では、野路と矢橋港をつなぐ馬道と呼ばれる古道に面して建物群が形成され、東山道跡と考えられる道路状遺構が発見されたことなどから、中世の宿駅「野路宿」ではないかという指摘がある。

野路宿は、鎌倉時代後期から、宿駅として衰退をはじめることが当時の記録から読み取れ、野路岡田遺跡の発掘調査成果からも同様の成果が得られている。この野路宿の衰退と入れ替わり登場するのが「草津」である。草津の地名の初見は、鎌倉時代後期の正安元年(1229)に編まれた「一遍上人絵伝」に求められ、この頃、草津が野路宿に代わる宿駅地としての機能を有しつつあったことを示すものといえる。

先に述べたように、湖上交通の要が草津には置かれており、織田信長・豊臣秀吉の時代にも、東国から京都に入るための要所として重視されていた。慶長5年(1600年)、関ヶ原の合戦のわずか2日後には、徳川方で先鋒をつとめた福島正則が草津村に禁制を出し、支配下に置いている。

続く慶長6年・7年(1601年・1602年)にかけて東海道と中山道が整備され、荷物をリレー方式で輸送する継ぎ立てのために常時36人・36疋の人馬を備えておくこと、土地の税金にあたる地子を免除することなどを取り決めた「伝馬定書」が各宿場に向けて出された。この中で草津も宿場として位置づけられたのである。

こうして草津宿は、東海道と中山道が分岐・合流する唯一の宿場として、参勤交代の大名行列から一般の旅人まで、さまざまな人が行き交い賑わうまちとなった。町並みの全長は1.3キロメートルと宿場町としてはさほど大規模ではないものの、天保年間の記録「東海道宿村大概帳」によると、本陣2軒・脇本陣2軒、旅籠70軒あまりが旅人を迎え、茶屋や荒物屋、両替商などの商家、農家などが軒を連ねていた。荷物の継ぎ送りの拠点であるとともに、宿場運営の中心であった「問屋場」には、運賃の不正を防ぐため、荷物の重さを検査する「貫目改所」が置かれた。貫目改所が設置されたのは全街道のうちでも5ヶ所のみであり、草津宿がいかに重視されたかがうかがえるだろう。

数多く並んだ休泊施設の中でも最も規模が大きく、格の高いものが本陣である。本陣は、大名や旗本、勅使、公家など、限られた層のみが利用できる特別な施設であった。草津宿には江戸時代を通して田中七左衛門本陣と田中九蔵本陣の2軒が置か



図 4-19 草津宿本陣



図 4-20 一遍上人絵伝

れていた。このうち、田中七左衛門本陣は今でも江戸時代後期の姿を残し、現存する本陣の中でも最大規模を誇るとして、昭和24年(1949)に「草津宿本陣」として国の史跡に指定された。

さらに、発掘調査によって江戸時代後期の「本陣屋敷絵図」に描かれた建物のものと考えられる礎石などが発見され、次第に当時の姿が明らかとなりつつある。発掘時に焼土面が複数確認されたことと、「本陣由緒記」などにみられる火災の記録、および草津宿本陣の長期連続休業期を照らし合わせると、当時の本陣が火災に見舞われた際の影響が浮かび上がってくる。

草津宿本陣には、当主により代々守り伝えられた資料も数多く残されている。宿帳にあたる「大福帳」は、元禄年間から明治に至るまで書き継がれた計181冊が現存し、休泊者の一覧には、吉良上野介や浅野内匠頭、土方歳三をはじめとする新選組隊士、皇女和宮など、多くの歴史上の著名人の名前も見える。また、重要な休泊者を迎える際、門前や宿の出入りに掲げられた木製・紙製の札「関札」は3400枚余りを数える。いずれも、全国でも類を見ない規模であり、保存状態も良好である。

このほか、大名らを迎えるために当主が身に着けたと伝わる袴^{かみしも}、休泊手続きに使われた屋敷絵図と版木、調理道具なども現存し、本陣経営の実情を知る貴重な資料となっている。屋敷内に設えられた障壁画や調度類もまた、本陣を特徴づけている。

江戸時代の草津は、街道をたどって行き来する人どもの、そして文化が集まる土地だったのである。



図 4-21 草津宿本陣の大福帳



図 4-22 草津宿本陣の関札

② 草津を形づくる街道と津

草津市は、東海道と中山道が分岐・合流する宿場町を有していただだけでなく、多くの街道が走る場所であり、様々な歴史的価値の高い資料が残されている。東海道沿いに位置する常善寺の本尊である阿弥陀如来坐像および脇侍の3軀は、背後の壁一面に描かれた二十五菩薩来迎図と組合せることによって二十五菩薩の来迎が表されるよう工夫がなされている。

東海道から矢倉で分岐し、矢橋港へ至る矢橋道沿いには、本堂が国指定文化財となっている石津寺が所在し、さらに、かつて源頼朝が上洛中に鞭で神社の森を指したことにその名が由来するとされる鞭寄神社の表門は、膳所城の南大手門を移築したものとされる。守山宿から市内に入る志那街道は、先に述べたサンヤレ踊りが奉納される印岐志呂神社、惣社神社、三大神社、志那神社を經由して志那港へと結ぶ。浜街道が整備される以前より、矢橋道から志那街道までを南北に縦断する道であった芦浦道は、芦浦観音寺から安羅神社、木川薬師堂、

最明寺をつないで鞭寄神社に至る。

このように、東海道および中山道の枝道として、市内を縦横に道が走っていた。これら旧街道は現在でも当時の道筋を残しており、市域を形作る骨格であるとともに、様々な文化財を結ぶ散策路としても機能している。

また、陸路のみならず、「草津三湊」として知られた矢橋港・志那港・山田港を中心に湖上交通においても、重要な交通の要衝であった。特に、江戸時代以降、大津の石場港と草津を結んだ矢橋港は、東海道の渡し船の発着場として、大いに賑わった。多くの船が行き交う港の風景は「矢橋の帰帆」として、「近江八景」の1つにも数えられ、広くその名が知られた。現在では、かつて存在していた石積突堤^{いしづみつとて}が公園として整備され、弘化3年(1846)に建立された常夜灯が現存している。また、矢橋港の発展と整備に伴い、東海道の矢倉立場から矢橋港に向けて矢橋道が整備された。矢橋道沿いに建つ猿田彦神社は、寛永2年(1625)に勧請されたが、道の神である猿田彦命^{さるたひこのみこと}を祭る同神社は、おそらく矢橋道の整備に伴い勧請されたものである。



図 4-23 鞭寄神社表門



図 4-24 矢橋港の石積突堤

③ 宿場を取り巻く多様な文化

江戸時代は、旅が広く大衆のものとなった転換点でもあり、出版文化が花開いた時代でもあった。そうした時代背景の中で、歌川広重や葛飾北斎らによって、浮世絵の「名所絵」がひとつのジャンルとして確立、さらに「東海道五十三次」シリーズの出版によって、その人気は確固たるものとなった。人々は浮世絵を通じて、いまだ見ぬ遠い土地に思いを馳せ、旅に憧れを抱いたのである。東海道と中山道が会合する草津も、草津宿や草津川、矢橋港、姥ヶ餅屋などを題材にして、数多くの浮世絵が描かれ、全国へ流布していった。開業医であり、郷土研究者でもあった中神良太氏の「中神コレクション」の中にも、草津が描かれた浮世絵が数多く含まれており、当時の人々が抱いていた草津のイメージを知る上で、貴重な歴史資料と言える。また、浮世絵のみならず、十返舎一九の「続東海道中膝栗毛」に鞭寄神社が登場するなど、文学作品にも草津が登場する。

その一方で、浮世絵や文学作品以外にも、実用性の高い道中案内記も多く出版された。秋里籬島^{あきさとりのとう}がそのスタイルを確立した、挿絵入りのガイドブックである「名所図会」は、特に人気を博し、「東海道名所図会」などの街道に沿ったもの、「近江名所図会」などの地域ごとにまとめられたものなど、さまざまな名所図会が著された。草津も複数の名所図会に登場するだけでなく、矢橋港・鞭寄神社・木内石亭・青花紙・野路玉川・常善寺など、街道沿いの名所や名物が挿絵付で取り上げられるなど、その関心度の高さが窺える。



図 4-25 草津市街道位置図

また、逆に街道を介して、草津へ根付いたものもある。多くの力士が街道を通過して、巡業へと向かったこともあり、浅井了意の『東海道名所記』において、草津は相撲が盛んな土地柄として紹介されている。これを証するかのようには、市内には、地元頭取が相撲部屋を設け、相撲部屋に属する力士や京都相撲で活躍した力士の墓や寄進物などが多く残り、人々の生活の中に娯楽としての相撲が根付いていたことが指摘できる。

④ 街道を彩る名物・人物

街道は、行き来する人と共に情報や文化を伝え、産物を広めていった。全国に知られた名物・人物の背景にも、交通の要衝という草津の特色がある。

○竹根鞭^{たけねむち}

竹の根を加工した乗馬用の鞭で、参勤交代で東海道を通る武士たちの土産として広く知られていた。近代以降になると、鞭の需要が減少したが、竹根鞭を作る技術を生かし、ステッキや土瓶の柄などが作られるようになった。特に、ステッキは欧米で人気を集めた。しかし、徐々に生産者が減少し、現在、草津市内では生産されていない。



図 4-26 竹根鞭

○瓢箪

街道を往来する旅人に対して、水や酒を入れるための容器として販売されていた。明治以降も、東海道と矢橋道の分岐点である矢倉には何軒かの店があった記録が残っているが、現在ではわずかに一軒のみになっている。また、その用途も飲み物を入れる容器ではなく、縁起物として販売されている。

○姥餅^{うばもち}

江戸時代から現代に至るまで草津の名物として知られる、餅を餡で包んだ菓子。現在でも、草津名物として、JR 草津駅前などで販売されている。江戸時代には、東海道と矢橋道の分岐点に店を構え、多くの旅人で賑わった。その様子は『東海道名所図会』や歌川広重の「東海道五十三次」にも描かれており、人気のほどがうかがえる。店頭で使うため、「姥餅」とへら書きの入った専用の素焼きの皿が作られたほどであった。また、茶道に通じた当主が京都の名工に茶器を作らせており、これらは共に「姥餅焼」と呼ばれている。



図 4-27 草津張子(ピンピン鯛)

○草津張子

張子の郷土玩具。厄除け、特に疱瘡除けの意味を持つ赤色に塗られた、猩々、ピンピン馬、ピンピン鯛があり、子どもの健やかな成長への願いが込められている。



図 4-28 アオバナ

このうちピンピン馬やピンピン鯛を贈る風習は、かつては京都や大阪などで行われており、草津に伝わったものと考えられる。他地域でこの風習がなくなった後も、草津には残り、次第に草津独自の郷土玩具として知られるようになっていった。しかしいずれも、大正の終わりから昭和の初めにかけて姿を消している。

○青花紙

アオバナという植物から搾り取った色素を和紙に染み込ませたもので、江戸時代には、すでに近江国の名産として知られていた歴史を持つ。アオバナに含まれる青色色素が持つ水に流れるという性質を利用し、友禅染や絞染の下絵を描く際の絵の具として、長く用いられてきた。また、江戸時代には、浮世絵の青色染料としても利用されていたことが分かっている。しかし、現在、青花紙を生産する農家はわずかに数軒にまで減少している。

○木内石亭

「石の長者」木内石亭は江戸時代中期から後期にかけての人物で、大坂の木村兼葭堂、江戸の平賀源内など、多くの知識人と交流を持ち、弄石学を興した。珍石・奇石を集めた石亭のコレクションは生涯で3,000余りを数えたとされ、『東海道名所図会』などを通じて広く紹介されている。コレクションの大部分は散逸しているが、一部が弟子たちに伝えられ、今もその内容の多様さをうかがわせる。

石亭は当時、京・大坂・堅田方面の玄関口であった北山田港のそばに居を構えていた。全国から情報を集め、石の収集と研究に活躍した背景には、文物の集まる「港」というロケーションがあったのである。

○横井金谷

横井金谷は下笠生まれの画僧である。生涯の大部分を放浪の旅で過ごし、晩年は近江・坂本に庵を構えた。与謝蕪村に私淑し、その画風から「近江蕪村」と称される。

自らの生涯を描いた『金谷上人御一代記』からは、浄土宗寺院の住職を勤めたほか、各地の霊山を回った修験道の行者としても著名であったことがうかがえる。書簡の中で金谷は、自分の作品は護符になるとも書いている。一方で悪所に通い、賭け事をして遊ぶなど、奔放な一面もあった。自由闊達な人柄は、その作風にも表れている。

このように、竹根鞭など既に失われてしまったものもある一方で、街道を通り、草津から全国各地へと伝えられたものの中には、瓢箪や青花紙のように江戸時代からの技術が現代まで連綿と受け継がれているものもある。かつて、東海道と中山道が会う宿場町として、多くの人や物、情報、文化が行き交った草津宿の姿は、近代以降、大きく変容することとなった。しかし、社会の大きな変化を経てもなお、変わることはない街道文化が、本市には息づいている。



図 4-29 横井金谷作
『金谷上人御一代記』

表 4-3 主な文化財等とテーマとの関連性

番号	名称	テーマとの関連性	サブテーマ
1	史跡草津宿本陣	核となる文化財。田中七左衛門本陣、別名木屋本陣	宿場と 草津宿本陣
2	九蔵本陣跡地	「宿場大概帳」に記された本陣の跡地	
3	田中家文書	草津宿本陣に関する古文書	
4	魚寅楼	かつての旅籠屋「双葉屋」	
5	和宮下向時再現献立	草津宿通行時、和宮が田中七左衛門本陣で取った昼食を「和宮御方様御下向御道中御次献立帳」をもとに再現したもの	
6	山内家文書	草津宿関連文書	
7	草津宿場町遺跡	埋蔵文化財としての宿場町	
8	東海道中続膝栗毛	東海道 53 次について記録	
9	一遍上人絵伝	地名「草津」の初出	
10	東海道名所記	東海道の道中案内書	
11	辻海道遺跡	古代の道を検出	
12	黒土遺跡	古代の推定東山道を検出	
13	野路岡田遺跡	古代の推定東山道を検出	
14	坊主東遺跡	古代の推定東海道を検出	
15	矢倉口遺跡	古代の推定東海道を検出	
16	岡田追分遺跡	古代の推定東海道を検出	
17	上鉤遺跡	古代の推定東海道を検出(栗東市)	
18	下鉤東遺跡	古代の推定東海道を検出(栗東市)	
19	矢橋港	草津三湊の一。中近世の交通の要衝	草津を 形づくる 街道と航路
20	古典落語「矢橋船」	舞台として矢橋港が登場	
21	清浄寺	「冥途の飛脚」登場人物の梅川の終焉地といわれる	
22	大銀杏	矢橋港の目印となったとされる	
23	猿田彦神社	矢橋道沿いに立地。道の神を祀る	
24	矢橋道	矢橋港から守山市までを結ぶ街道	
25	志那閘門	近代の水運	
26	鞭寄神社	矢橋道沿いに立地。鞭寄神社表門は膳所城より移築されたもの	
27	石津寺	矢橋街道沿いに立地	
28	追分道標	東海道・中山道の合流地点に所在「右東海道いせみち左中仙道美のぢ」の銘文	
29	横町道標	東海道に所在。「右金勝寺志がらき道左東海道いせ道」の銘文	
30	立木神社	境内に旧追分道標が所在	
31	矢倉道標	東海道・矢橋街道の分岐点に所在。「右や者せ道これより廿五丁大津へ船わたし」の銘文	
32	大路井道標	「左中山道 右東海道」の銘文	
33	穴村道標	街道関連の道標	
34	新宮神社前道標	街道関連の道標	

36	久邇宮橋西道標	街道関連の道標	
37	岡本西道標	街道関連の道標	
38	岡本道標	街道関連の道標	
39	芦浦道道標	街道関連の道標	
40	瀬田道道標	街道関連の道標	
41	北山田道標	街道関連の道標	
42	伝旧大津宿本陣門	若宮八幡宮に移築されたと伝わる	
43	吉田家住宅主屋	江戸時代の庄屋	
44	吉田虎之助	淡水真珠の養殖等、水産業に貢献	
45	近代山田港	近代の港	
46	常夜灯(矢橋港)	湖上交通の灯台として機能する	
47	常夜灯(北山田港)		
48	常夜灯(志那港)		
49	常夜灯(下物町)		
50	常善寺	阿弥陀如来坐像及両脇土像、二十五菩薩来迎図を所蔵。東海道沿いに所在	宿場を 取り巻く 多様な文化
51	光伝寺	木造阿弥陀如来坐像を所蔵	
52	西方寺	西方寺鐘楼、木造薬師如来坐像を所蔵	
53	近江名所風俗屏風	当時の宿場町を描く	
54	中神コレクション	草津を描いた浮世絵含む	
55	山口コレクション	草津を描いた浮世絵含む	
56	荒馬安五郎寄進狛犬	草津出身の力士、荒馬安五郎が新宮神社に奉納した狛犬	
57	鮎ヶ滝墓	草津出身の力士の墓	
58	七夕丸右衛門墓	草津出身の力士の墓	
59	七夕丸右衛門一門墓	草津出身の力士の墓	
60	竹川平六墓	草津出身の力士の墓	
61	錦崎清右衛門墓	草津出身の力士の墓	
62	駒引丸右衛門墓	草津出身の力士の墓	
63	明治 22 年相撲番付	相撲関連資料	
64	竹根鞭	草津のかつての名物、現在は作られていない	街道を彩る 名物・人物
65	瓢箪	草津の名物	
66	姥ヶ餅	草津の名物	
67	姥ヶ餅焼	草津の名物	
68	草津張子	草津の名物	
69	青花紙	草津の名物	
70	木内石亭	草津出身の著名人。弄石学の第一人者	
71	木内石亭旧宅碑	草津の著名人、木内石亭の旧邸位置を伝える石碑	
72	木内石亭旧宅内常夜灯	木内石亭旧邸内に所在	
73	西遊寺鳳嶺コレクション	木内石亭の弄石コレクションの一部を引き継ぐ	
74	願行寺了観コレクション	木内石亭の弄石コレクションの一部を引き継ぐ	

75	山崎宗鑑	草津出身の著名人。俳諧の祖	
76	山崎宗鑑旧宅碑	山崎宗鑑の旧宅の位置を伝える	
77	横井金谷	草津出身の著名人。画家として有名	
78	宗栄寺	横井金谷の墓	
79	草宿街道交流館	近世の宿場町草津に関する博物館類似施設	—
80	草津まちづくりセンター	文化財活用拠点	
81	大路まちづくりセンター		
82	渋川まちづくりセンター		
83	矢倉まちづくりセンター		

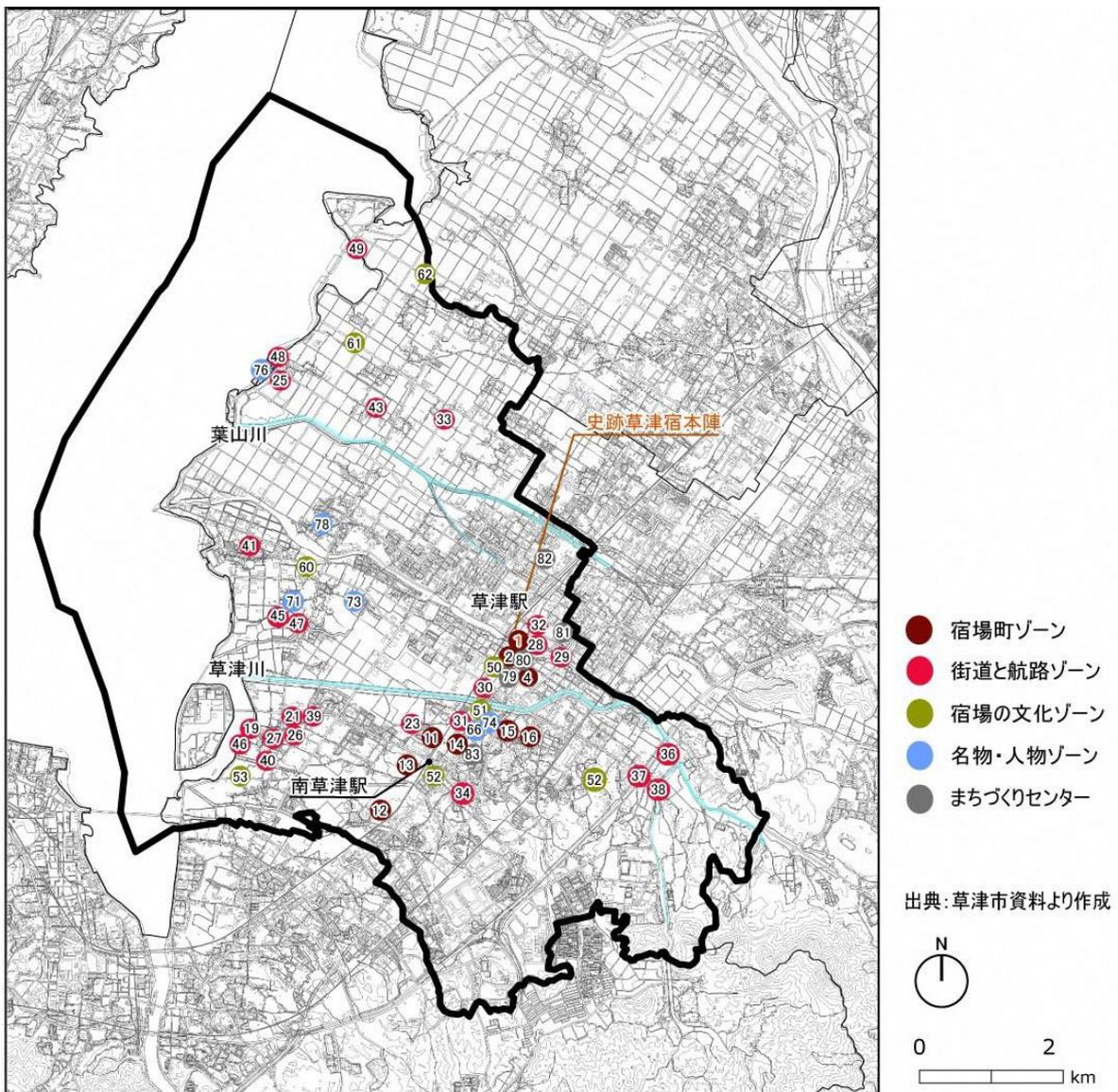


図 4-30 テーマ 3 「街道ゾーン」に関する文化財の分布